

## 1. はじめに

平成 17 年度から 19 年度まで 3 年間、在外教育施設派遣教員としてダッカ日本人学校に勤務しました。BANGLADESH を片仮名で書いてもらおうと半数くらいしか正答率がないといわれるほど知名度の低い国で、実際自分もバングラディッシュであると思っていました。位置も地図を見ないと正確には…と言った状況でした。

しかし、このバングラディッシュの知名度を大きく上げたのが、ムハンマド・ユヌスさんです。ご存じの通りノーベル平和賞を受賞した方です。



### ～ユヌスさんの略歴～

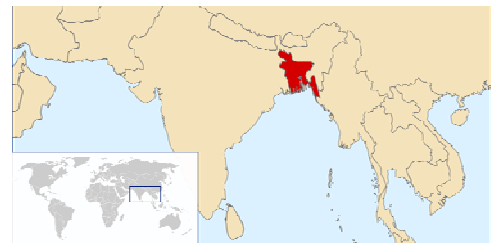
バングラディッシュにあるグラミン銀行総裁、経済学者であり、マイクロクレジットの創始者であるユヌスさんは、英国統治下にあったバングラディッシュの南部チッタゴンに生まれ、チッタゴンカレッジを経て、ダッカ大学を卒業します。フルブライト奨学金を得て渡米し、1969 年にヴァンタービルト大学で経済博士号を取得しました。1969 年から 1972 年までミドルテネシー州立大学で経済学の助教授を務め、その後、バングラディッシュ独立後の 1972 年に帰国し、チッタゴン大学経済学部長に就任。1976 年にグラミン銀行プロジェクトをジョグラ村にて開始し、1983 年に同プロジェクトはバングラディッシュ政府の法律により独立銀行となる。2001 年、第 12 回福岡アジア文化賞大賞を受賞。2006 年、グラミン銀行と共にノーベル平和賞を受賞し、2007 年 2 月、新党「市民の力」を発足。2008 年、第 5 回北九州市環境賞大賞を受賞。



## 2. 現地の様子

### (1) 地理・歴史

バングラディッシュのバンガラ=ベンガル、デシュ=国、「ベンガルの国」という意味です。インドとミャンマーの間に位置し、国土は日本の約 4 割(北海道の約 2 倍)、人口は約 1 億 4 千万人。1947 年、ヒンデュー教徒対イスラム教徒の宗教対立を背景にイギリスの植民地支配からインドが独立した際、現パキスタンと共にイスラム教を国教とする東西パキスタンとして独立しました。しかし、東西に 1,800km も離れた国土、異なる言語、その他多くの矛盾を抱え、わずか 24 年後、1971 年にパキスタンから分離独立。東パキスタンはバングラディッシュとして再び独立を果たし、現在に至っています。



最近の情勢では、2007 年 1 月末、総選挙が行われる予定でしたが選挙改革を巡る政党内対立による国内情勢悪化のため、同年 1 月 11 日非常事態宣言が発表され、総選挙も延期となりました。この時は、一切の外出が禁止され、国外にいるものは入国を制限されるほどでした。目下選挙管理内閣の下、総選挙実施に向けた準備が進められています。

## (2) 産業

バングラデシュ経済の中心は農業で、全雇用の約6割が農業関連に従事しています。最大の農業生産物は米ですが、1億3千万人の人口を養うには灌漑設備の不備に加え、例年のサイクロン・洪水による被害が甚大な為、食糧自給は達成されていません。従って、外国からの援助と政府や民間企業の輸入に頼らざるを得ない部分が少なくありません。

この国の独立以来の最大の目標は、貧困の撲滅であると言われていています。そして、このためには工業化を進めることが重要であるとして、政府は様々な政策や方針を打ち出しており、近隣諸国に遅れをとらず、東南アジアのような発展を目指しています。例えば、99年の発表では今後10年間に産業に占める工業の割合を25%にし、総就業人口の20%が工業生産によって生計を立てられるようにするという目標です。しかし、この国の工業は70年代以来現在まで、産業全体の10%前後でしかなく、目標のみで具体的な方策を立てていない現状では今後大きく飛躍するとは考えにくい状況にあります。

主な工業製品は衣類、皮革製品、食品、飲料、タバコ、化学製品、金属加工石油精製などです。そして、その中心は衣料品ですが、これは輸出品の中心でもあり、輸出総額の8割近くを占めているようです。衣料品は古くはタイやインドネシア等でも主力製品でしたが、近年ではより人件費の安い南西アジア地域にその生産拠点が移りつつあります。しかし、資源に乏しいバングラでは、全ての原料を輸入に頼らざるを得ず、また電力不足、港湾機能の停滞等のインフラ部門での未整備や自然災害などを要因に投資環境が極めて悪いため、産業が育つ素地が整っていません。従って、完成品を輸出しても実際にはバングラデシュに落ちる金は少ないようです。

この他には冷凍海老やジュート製品等があります。ジュートとはインド周辺を原産とする一年草で、これを使ってロープやナンキン袋等に加工しています。また、カーペットの裏地や木の根や幹を保護するために巻いたりするのにも使いますが、最近では環境に優しい商品という事で需要が伸びているようです。冷凍海老は養殖が殆どで、日本へも輸出されています。但し、日本の消費者が形、大きさの均一性に敏感なため、なかなか日本市場のシェアに割り込むには至っていないようです。

## (2) 気候

バングラデシュの気候は、熱帯モンスーン気候に属し、大きく雨季と乾季に分かれ、年間降雨量は2,300mm程度です(ちなみに日本は1,800mm)。

一年中夏なのかと思っていた所、現地では6つの季節があると言われていています。高温多雨多湿の時期が長く、4月でも35°Cに達するほど暑いです。自宅や学校などにはエアコンがありますが、多くの発展途上国同様、停電に悩まされるのもしばしばでした。

夏の終わりには、ライチが出始め、続いてマンゴー、国を代表する果物ジャックフルーツが市場に出回ります。ライチ、マンゴーはとても美味しく食しましたが、かぐわしい臭いが鼻を突くジャックフルーツは好き嫌いがはっきり分かれるようです。

本格的な雨季が始まると、一日中雨が降り続くこともあり、気温は若干下がりますが湿度がかなり高くなり蒸し暑く感じられました。夕立やスコールも頻繁にあり、ダッカ市内でも道路に水があふれ、あちこちで小さな洪水が起こることもあります。

9月に入ると徐々に雨も少なくなり、再び猛暑が続きます。秋とは名ばかりで、11月が終わるくらいまで体温前後の危険な暑さに見舞われます。この時期から翌年の雨季が始まる6月くらいまでは、ほとんど雨が降らないため、ほこりっぽい時期が続きます。(鼻の中が真っ黒になるほどでした。ほこりだけでなく、大気汚染の影響もあると思われます。)

年末年始にかけて、やっと最高気温 30℃を切る季節が訪れます。派遣一年目は若干涼しいかなと感じる程度でしたが、周りのベンガル人たちはダウンジャケットやセーターを着込んだり、マフラーを巻くなど何とも大袈裟ないでたちとなります。しかし、足元はサンダル。最低気温が 10℃を切ると凍死者が出るなど信じられない状態となります。北海道との余りの気温差に、にわかに信じがたい状況でしたが、三年目の冬になると、体もバンガラ仕様となりとても寒く感じ、彼らの気持ちが分かるようになりました。

### (3) 現地校の教育について

#### ○小学校の概要について

・就学年齢は、満6歳になった後(この点は日本と同様)の1月からの5年間です。この際、誕生日を不正確に書くことが良く見られるようです。これは、将来の企業採用時に若い方が有利であるため、生年月日を一年遅らせたり、そもそも誕生日が正確にわからないなどの理由があるようです。また、家庭の事情により入学が遅れる場合も多くあるため、実際には様々な年齢の児童が混在する実態となっています。



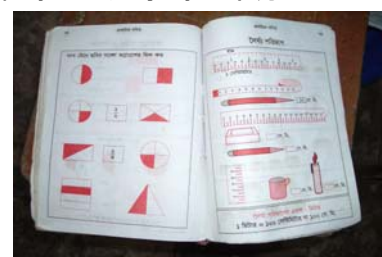
・多くの学校で教室が不足しており、2シフトで授業が行われています。1時限は35~45分で、金曜日が休日、木曜日が半日、その他の日は通常日課で授業を行っています。授業の合間に休憩時間は無く、手洗いに行きたい児童は授業中に教師の許可を得て行く仕組みになっています。

・試験は年3回実施。年度末試験では、各科目の3分の1以上の得点を取らなければ落第となります。

出席番号は前年度の得点合計順に決めるため、成績の良い児童が若い出席番号に固まっています。小学校1年生から2年生への進級に落第は無いが、それ以上の学年において実施されています。

・小学校1年生の就学率は90%程度ですが、学年が進むにつれて落第等により学習意欲を失ったり、家庭の事情で登校できなくなる児童が増え、5年生卒業時には入学時の半分から三分の一程度の児童数となるようです。

・教科書は国から支給されていますが、毎年新しいものを個人に与えられるわけではありません。前年からの使い回しで、見たところ1~2年で更新されているようには感じられませんでした。このような教科書が職員室の隅や廊下などに山積み



になっていました。

・教員については、小規模校と中・大規模校では採用が異なるようです。小規模校は地域の名士がボランティアに近い状態で子供達の教育を行っていました。また、中・大規模校では、専門的な教育を受けた教師が数年のローテーションで学校を異動し、実践に当たっていました。



## 2. ダッカ日本人学校について

### (1) 概要



・創立は昭和 50 (1975) 年開校、小学部 11 名でスタートしました。その後、昭和 58 年には小学部 42 名、中学部 14 名の計 56 名の規模となりますが、この年をピークに徐々に減少し、現在は 10 名前後まで落ち込んでいます。

・校舎は現地企業の寄付により建設され、グラウンドとプールがありました。(体育館はなし)

・幼稚部が併設されており、近年は小中学部の児童生徒数を上回る 15 名前後が在籍しています。

### (2) 子ども達の登下校の様子

・勉強道具のほかに、水筒、弁当を持参しバスで通学です。一部、バスを利用しない児童生徒もいましたが、その場合は保護者による送り迎えです。コンビニは存在せず、冷凍食品も日本人の口に合うものはほとんどありません。限られた食材での毎日の弁当作りは、保護者にとって重い負担となっていたようです。



・バス委員会が中心となり、バスの購入、維持・管理、運転手・添乗員の採用、給与の支払い、雇用管理、そして日々のバス運行を行っていました。バス老朽化による買い替え問題、児童生徒数減少による保護者負担の増加、運転手や添乗員の雇用管理等、様々な問題を抱えつつの運営でした。日々の運行管理は勿論、事故発生時は大使館領事部と連携し、子ども達が安全に避難できるようにしました。軽微な接触事故を含めると年に 3 回程度は事故が発生していました。(ちなみに私の赴任と入れ替わりで帰国した方々は、帰国便に搭乗するため空港へ向かう途中で事故に遭遇したそうです。バスは走行不能となり、もう一台のバスに乗り換えて空港に向かい、何とか予定した便に搭乗できたそうです。)



### (3) 学習の様子

・教科書は日本政府より現地大使館を通して支給。(日本国籍保有者は全員)

・保護者の英会話学習に対するニーズが高く、小1から実施(幼稚部も実施)。学校採用のスリランカ人、アメリカ人の講師とTTでの授業が行われています。

・週時程は、日曜日から木曜日が登校日で、金・土曜日が休業日です。これは、イスラム教の休息日に準じているためです。ハルタルといわれる暴動による休業を補い、時数を確保するため週2回7時間目まで授業を行いました。また、小中併置のため教科担任制に近い形になっています。

・総合的な学習の時間は、現地理解を深めるためのダッカタイムとして行われています。…現地インターナショナル校やフレンチスクールとの交流、リキシャ調べ、レンガ割り体験、建築物調べ、蚊について調べるなどの学習が行われていました。

・2003年には学校敷地内で不審物が発見され、調査の結果、手製の簡易爆弾であることが判明。以後、学校警備員の増員、見張り台の増設、塀を高くし有刺鉄線を張り巡らす、などの措置が取られました。



### (4) 保護者のかかわり

・年3回の授業参観、懇談にはほぼ100%が出席。1年目に公使の息子さんを担任しましたが、授業参観は勿論、懇談にまで出席いただき、驚きました。

・運動会は日本人会、現地校に通う日本国籍を持つ児童生徒と合同で実施。児童生徒数が少ないため、日本国籍を持つ児童も参加していました。しかし、運動会というものを知らないで、用意ドンで変な方向に走って行くなど、いつも大混乱でした。また、現地の日本人の方々も多数参加し、子ども達の運動会を盛り上げていただきました。学習発表会はダッカタイムの発表をメインに、全校での英語劇や合唱を行いました。バングラの日本国大使をはじめ、多くの方々に参観していただきました。

・もちつき大会、親子ふれあい活動(肝試し、花火大会等)、おやじの会など多様なイベントがあり、いずれも日本で行われている伝統的な催しが根付いていました。

・昨今は民間企業の人員削減・撤退が相次ぎ、児童数の減少が顕著になっていました。これに歯止めをかけるため日本国籍を持つ児童(主にハーフと言われる方々)が入学するようになりましたが、成育歴が個人により異なるため、言葉の問題から中学卒業後の進路と様々な問題が発生しています。また、授業料の支払い遅延や滞納などの問題も発生しています。



## 4. 生活体験から

### (1) 空港

ただでさえ気温が高くほこりっぽいのに、とにかく人が多くて密集しています。空港施設の外に出ると更に多くの人の出迎えを受けます。空港から自家用車で人をかき分けて出て行くという表現がぴったりで、窓を開けられないほどでした。ちなみに、空港に集まる人々は、家族や親戚・友人の出迎えと言われていますが、勝手に荷物を運んで後でお金を要求したり、荷物から目を離しているとなかったりすること等から真偽の程は定かではありません。



### (2) 交通事情



「交通ルールはどこへ？」そんな言葉が浮かんでくるほどの状況です。信号無視や逆走は当たり前。他の車が通れなくなろうが、とにかく前に突っ込んでいきます。過積載もここまでくれば褒めてあげたくなくらいすごい。庶民の足、リキシャとCNG、乗用車にトラック、とどめは人。歩道、車道を歩くだけでなくバスの上にも…

年々増え続ける人口に対して、道路整備は追いついていない、メインの通りは常に交通渋滞。しかし、渋滞の原因は、絶対的な車の数の増加のみならず、交通規則を守らないこととマナーの悪さにもあるようです。まず、交差点でも信号は守らない車が多い。車線はあるのか無いのか分からない状態。「お互い譲り合って」なんて言葉は…一台一台順番に「譲り合って」行けばスムーズに流れるのに、と思いながら渋滞の中を走る日々でした。

### (3) マーケット

バングラデシュでは通常、販売品に値段は表示されていません。基本的には交渉制です。売り手と買い手が話し合いで納得したところで交渉成立。しかし、普通の日本人にとっては、これが難しく、私などは外国人とすることで高い値を言われてしまい、多く支払ってしまうことがよくあ



りました。

最近は、綺麗なスーパーマーケットも数件でき、値段の付いた商品を購入できるようになりました。綺麗な分値段も高く、日本の物はほとんど手に入りませんでした。このようなマーケットがある自体に幸せを感じました。



#### (4) ハルタル

ハルタルとはゼネラルストライキのことです。ハルタルは通常、野党連合により2-3日前に行われる日が発表されます。時間帯は日の出から日没まで。ゼネストですので、全ての活動を停止せよということで、政府機関、銀行、企業、商店ガソリンスタンド等々全て安全の為に閉じることになります。下手に店を空けているとハルタルの為に雇われた反政府運動家により焼き討ちに会う可能性があるためです。



失業者が多いバングラデシュでは少しのお金を与えるだけで簡単に人が集まります。一人1日100タカ（約200円）で野党連合に雇われていると言われていました。バスを焼くとボーナス100タカ、投石で破壊するとボーナス100タカと収入が増える為に過激になっていきます。その群集はポリシーなど無く100タカをもらう為にどちらの政党にもついて行く。

このような訳で「ハルタル」が宣言されると学校も臨時休校となり、自宅待機となっていました。2-3日前から発表があり、事前の通告もあるため殆どの市民は外出しておらず死者も被害も思った以上に少ないのが最近のハルタルですが、決して被害がないわけではなく、毎回、けが人や死人が出ていました。

#### (5) 建築物



基本的にはレンガ造り。細い鉄骨を束にし、そこにセメントを流し込んで柱を立てます。木製の床面を竹で支え、コンクリートを流して床を作ります。壁はレンガを積んでいき、漆喰で仕上げを施しているそうです。20階を越す高層ビルがいくつも作られています。日本という建築基準法などはないらしく、いくつかの制限はあるが増築、改築、階数などは自由で、お金ができれば増築できるよう柱鉄筋が屋上から飛び出している建物が

多いです。

数年前には6階建てのフラット(共同住宅)が崩壊し、多くの人が圧死した事故が起こって



います。築100年の3階建のビルに、3階分建て増ししたために起こった事故だそうです。日本人の感覚では全く理解できません。しかも、バングラでも地震はあるとのこと。赴任直後に某大手建設会社の所長さんから「耐震強度は、震度4クラスと思われる」と聞き、地震だけは来ないでくれと、心から思いました。

#### (6) コロバニー・イード

犠牲祭と呼ばれるイスラム教のお祭りで、私にとってはかなり衝撃的でした。犠牲祭が近付くと広場に仮設の牛マーケットができ、普段見たことがない肉付きの良い牛が集まってきます。大多数はインドから輸入されているそうです。



この犠牲祭の名物は、金持ちたちが自分の家の前で牛やヤギなどの家畜を殺してアラーの神に捧げ、その肉を貧乏人にふるまうといった物です。この日は、街のいたるところで血なまぐさい光景が展開されます。

バングラでは、普段でもアラーの名を唱えて殺した家畜でなければ食べてはいけないことになっているそうです。アラーの神にお祈りを捧げてから牛の足をしばり、刃渡り30センチ位あるような刃物で首を切り落としていきます。そして、解体した後は、貧しい人たちがそのおぼろにあやかろうと、門前に大量に群がって来ます。一般的に、牛1頭で6～7人が救われると言いますが、値段の高い立派な牛を殺すことがその家の富の象徴になっているそうです。



この犠牲祭、実は残酷なだけでなく、平和と寛容の精神を持ってこれまで隣人に抱いていたえん恨や悪意をすべて忘れて、友愛の精神で、この日を新しい人間関係をつちかう門出とする。と言った意義がこの祭日にはあるのだそうです。

## 5. おわりに

バングラデシュは確かに貧しかったです。しかし、皆必死に生きていました。様々な面で絶対不利の状況でも彼らは、明るく、たくましく、生活を楽しんでいるようでした。今の日本社会では想像を超えた営みを実感することができました。

赴任地がバングラだと分かって時、不安や悩みが無かったと言ったら嘘になりますが、実際に現地生活の中で本当にバングラに行ってきたと思えました。帰任した今は、バングラで生活した3年間が走馬灯のようによみがえり、かけがえのない時間であったと実感できます。

イスラム社会に触れ、文化・生活面では厳しい部分もありましたが、本当に貴重な経験ができた3年間でした。この経験をよりよい形で子ども達、地域社会に還元していけるよう、自分自身もベンガル人の良い所を見習って前向きに研修を深めていきたいと思えます。